

最優秀賞

「現実が勝るまで」

愛知県立半田工業高等学校 建築科 3年
新美貴子

「自分のお城を建ててみたい」そう思うことは、この世のほとんどの人が通る道だろう。

私もその中の一人だった。むしろ、周りの人より強い気持ちがあったと思う。初めて建築に興味を持ったのはこんな単純なきっかけだったと思う。

小学生になった私は、現実の世界より、小説の中の世界のほうが好きだった。小説の中に出てくる架空の建物を想像し、自分の頭の中に非日常的な世界を創造していった記憶がある。いつしか私の頭の中は、自分の理想の建物で溢れていった。このころには、自分で考えて作り出す建築物の魅力にはまっていた。

そんな感じで夢を見ながら生きてきた私は気がつけば高校生になっていた。夢見がちな性格と、想像癖は今も変わらず、あのころと変わったことといえば、自分の「お城」を建てたいから自分の「お家」を建てたいになり少々現実味が増したことだけだった。「自分の家を至高のものにしたい」その一つの目標を達成するために、工業高校に入学してしまったのは、自分でも驚きを隠せない。私はまだ子供だったけど、自分の人生を初めて自分の意思で決めた。そのくらい建築に惹かれていた。

ただ、この目標を叶えるために、私には超えるべき壁がたくさんあった。まずは、性別問題だ。工業高校に進学するにあたり、父親に反対された。「工業高校は男が行くものだ。女が行くところではない」と。確かに世間のイメージ的にも工業高校に女が行くことは珍しいことだと思う。力で負けてしまうのは覚悟していた。でも女だからできることもあると思うし、私だからできることもあると思う。かかってこい男子。そう意気込んでいったけど、私は間違っていた。高校に入ると別に女だからとか男だからとかそんな扱いはあまり受けなかった。たぶんこれから先の人生も一人の人間として扱ってくれるのだろうなと思った。建築の世界は、私が思っていたほど性

別なんて関係なかった。だから私は、一人の人間として必要とされる人になろうと思った。

そして、建築をより深く勉強していく途中でもう一つ大きな壁が現れた。それは、私には表現する力が無かったことだ。頭でイメージしたものをいざ紙に書き出そうとするとそれができなかった。それが本当に悔しくて、悔しくてたまらなかった。私一人ではどうしようもなかった。そんなとき同じクラスの人に私のイメージを伝え紙に書いてもらった。私には表現できなかったものが紙に映し出される様子には感動した。ずっと一人で作ってきた世界が他の人の手によって表現されていく様子を見て、わたしは初めて人と協力してものを作り出す魅力に気がつけた。私も誰かのために何かしたい。そんな感情を持ったのはじめてだった。「皆で力を合わせることが建築の魅力だ」そういうことを言う人は多いけど、確かにそうだと思った。

私の言葉に代えて言うとするならば、建築の魅力は「一人ではできないこと」だ。ずっと一人の世界を楽しんできたけど、他の人の手が加わることでより魅力的になった。これが何人も何十人も人が協力すると、きっと魅力も何倍にも何十倍にもなると思う。そんな魅力で溢れた建築物が町に溢れているのだから、現実の世界も面白いかもしれない。

最後になるが、私はもうひとつ建築の魅力を知っている。それは「未来予想」だ。私たちは明日がどうなるかも分からないのに何十年先の未来のことまで考えて建物を建てる。

しかも、自分の未来すら分からないのに他人の未来まで考えて家を建てる。一人一人の人生に合わせてつくる未来予想図みたいでわくわくする。私も自分の人生だけじゃなく人の未来も考えられるようになりたい。いつしか私の頭の中より面白い現実の世界を見てみたい。そんな世界を作るのは私かもしれない。